

## ルソン島での苦難

東京部 六戸善作

私は、ルソン島の軍直属の農場勤務者である。

昭和二十年五月末、岩倉大佐に呼び出され貨物廠本部のバラット撤退計画を打ち明けられた。それによると、「部落民の水牛と牛車を徴発し、これに軍の物資を積んで脱出する。囑託四人と君の家族は、その後十二時過ぎ頃、農場を出発して欲しい。」と。

私は、マラリアを再発、意識がもうろうとしていて、ランタップに着いた頃は、高熱はげしく、体は衰弱し、気力がなくなっていた。

本部は既に、前日バガバックから、このランタップに移って来ていた。

私はベッドに移され、キニーネの注射などで手厚く看護され、元気をとりもどし、六月九日の午後、ラムット川の氾濫があるため部隊は直ちに出發とのことで

ある。

この命令で、ランタップにいた各部隊や車両がいつせいに動き出したので混乱した。

川は既に濁流がうず巻き、橋げたを洗っていた。流失寸前である。

私と妻が幼児四人を連れて渡り、私物や食糧を折り返し運んだ。

六月十日早朝、川はどうなっているか、私は対岸を眺めたが、多数の將兵が、まだ橋を渡れなかった。

そのうち敵機がきて物すごい機銃掃射、次には迫撃砲弾が無茶苦茶に飛んでくる。生きた心地はなく、顔面蒼白でこれからどうするか、將兵から本部を追求する声が出てきた。

私は病後でもあり、幼児四人をかかえては、どうにもならず、兎に角、小屋で休み、体力の回復を待つことにした。

午後、人の気配を感じたので顔を出したら、將校が立っていた。將校から、あなたは農場の六戸さんではないですか、と。私にはおぼえがなかったが、バラット

通過の際、野菜をもらった者だと言われた。

私が今までの事情を話すと、将校から、自分に良い考えがあると言って、水牛を一頭引つ張ってこられ、牛に荷物を乗せて出発しなさいと言う。

それから家族六人の避難行が始まった。

妻は双子二人を背負い、長女の手を引き、私は背負った荷物の上に長男を腰掛けさせ、肩車にして水牛を引き、月明かりの中、人家も無い草原を水牛の歩みに合わせて歩いた。

私達の身近に迫撃砲弾が炸裂したので、水牛が暴れだし、背中の荷物を振り飛ばして逃げ去った。

私達はこの五日間、毎日砲弾と機銃掃射が休みなく撃ちこまれるので生きた心地もなかったが前進してきた。この前進は大変なのだ。

ここまで水牛で運んでこられたが、六人分の食料、野宿用具、衣類、おしめにいたるまで一人で運ばなければならぬ。私は荷物を背負い、妻は双子をおんぶし、右と左に四歳、二歳の手を引いて、坂道を歩くのだ。橋はこわされ、水の中を歩く、荷物は三回ほど折

り返し運ぶ、マラリアが再発、体力は消耗、途中道端で死体を何十と見てきた。生きること、このへんであきらめ一家六人自決を決意して、私は妻に同意を求めた。妻は、死ぬのはいつでも死ぬます。子供は四人ともまだ元気です。しっかりして下さい、と言う。

それにしても、私達家族六人の苦しい行軍はいつまでつづくのだろうか、体力には限界があり、気力だけではどうにもならない。道端に休息し横になった時、草むらに牛車が見えた。どこにも故障はなく牛車は動くのである。天祐だ。私は急に元気になった。

牛車に子供達と荷物をのせ、私が牛車をひっぱり、妻が後押しした。

翌朝、早く私達はサントドミンゴの山麓にある集積所に到着した。

バラット時代の本部の人達は皆、私達の到着を喜んでくれた。

そこから、また移動である。キャンガンに着いたら雨だった。民家のひさしの下に家族は身を寄せあつて雨を避けた。

六月二十四日、この年の三月十日に生まれた善穂が死んだ。生まれて三か月の短い命であった。

六月二十六日、部隊はバクタンを出発し、マゴックに向かった。十二キロの道のりであるが私達は山の中腹に作られた細い小さな道を歩く。片側は谷になっており、無言で歩いた。

七月四日、私は近況報告のため、貨物廠本部を訪ねた。

ここまで戻ったのに双子の生き残りの良穂が、又死亡してしまった。子の二重の死にあつての悲劇は悔やまれて涙も乾いた感じである。

八月十五日、終戦、この日を境にあればほど熾烈をきわめた砲撃はびたりとやみ、それから約一か月後の九月下旬、家族を山に残したまま軍と共に下山し、キャンガンの米軍に投降武装解除をうけ、満一年後の昭和二十一年九月、引揚船で名古屋に上陸、帰郷した。

## 海南島の思い出

兵庫県 坂東貞市

海南島三亜・海軍特務部・私は（開拓訓練所・南方開拓農業研究で）、昭和十七年五月より昭和十八年五月まで、訓練を受け、第一次開拓民として三亜飛行場近くの開拓村六郷村に入植した。

当初は約二百人の予定地で、銃を持って夜間は入植者が交代で、村及び附近の警備治安に勤め、昼は新鮮な野菜、果物、稲作等の作づけを行い、日夜努力しました。

現地人の小作農家二家族が割りあてられ、入植当初、熱帯性の悪性マラリアや赤痢などが発生し、病気のために老人や幼い子供達が次々と死んでゆき、私もその病気にかかった一人でしたが、海軍病院に入院、奇跡的にも一命を取りとめました。

昭和十九年の六月頃から次第に戦雲があやしくなっ